



No.1 November 1985

館報の創刊にあたって

附属図書館長 久留島 陽 三

このたび附属図書館の館報が発刊されることになりました。

本学の附属図書館は、研究・教育に必要な文献資料を収集・整理・保存し、これらの文献資料を教職員・学生の利用に供するとともに、必要とする学術情報を速やかに提供する等のサービスを行っております。したがって、図書館は、研究と教育の府たる大学の心臓部ともいべき重要な機関であると考えます。

昭和24年に開設以来、全学的な協力によって、年々蔵書は増加し、1979年には100万冊の大台を突破し、現在は約127万冊になっております。

とくに中央館では、現書庫の収容能力60万冊を遥かに越え93万冊に達しています。その他、池田家文庫、Pfeffer文庫等の特色ある大型コレクションをも備えた、文字通り新制大学のトップ級の図書館に発展しております。

館報の発刊によって、このような図書館の現状を利用者の皆さんにお知らせするとともに積極的な意見や要望をいただいて今後の図書館サービスに反映してゆきたいと考えております。また他大学の附属図書館や地域の図書館との情報交換の一助にもなればと念願しています。

館報の創刊にあたって、本学の図書館は将来どうあるべきか、したがって、どのような課題をもっていかんかということについて若干述べておきたいと思ひます。

第一は、総合大学院博士課程をもつ大学にふさわしい図書館づくりを行なうこと。

すでに御承知のように、本学の念願であった総合大学院博士課程のうちの自然科学研究科、5専攻のうち2専攻（物質科学専攻、生産開発科学専攻）が本年4月に認められ、昭和61年度以降、残りの3専攻（生体調節科学専攻、生物資源開発科学専攻及びシステム科学専攻）の増設によって、独立した自然科学研究科が設置される予定であります。また引き続き、人文・社会科学研究科の設置が望まれています。

したがって、図書館としては、早急に総合大学院の必要とする文献資料、ならびに学術情報の収集・利用の長期計画を樹立することが緊急の課題であります。

第二は、国際化に対応した地方大学として、「内外に開かれた大学」にふさわしい図書館づくりを推進すること。

目

次

・館報の創刊にあたって……………1	・係の紹介 参考調査係……………5
・私にとっての岡山大学附属図書館……2	・館報名「楷」の由来について……5
・図書館を利用して……………3	・図書館統計……………6
・附属図書館業務電算化について……4	・日誌……………6

年々増大する外国人留学生、国際次元での多面的な交流と発展、地域研究への要請など、本学に期待されるところがきわめて大きくなっております。

したがって、図書館は、これらの要請に十分対応しうる、特色ある図書館サービスの計画を樹立することが必要であります。

第三は、高度情報化に対応する大学にふさわしい図書館づくりを推進すること。

現在、高度情報化に対応した大学の研究・教育体制の確立が強く要請されています。本学では、すでに「総合情報処理センター」が設置されているのも、その対応の一つであります。

したがって、本学の図書館は、このセンターとの密接な協力関係の上で、学術情報ネットワークを早急に整備拡充することが緊急の課題となっております。

以上、三つの大きな課題を解決してゆくためには、現在あまりにも国の財政状況が厳しく、定員削減、予算の大幅減額、さらには文献資料価格の急騰、などによる困難が予想されますが、本学の附属図書館としては、全力投球でのぞみたいと思います。

しかし、この課題は学内の皆さんの理解と協力なしには完全に解決してゆくことはできません。館報がその役割の一端をになってゆくことを念じております。

(くるしま ようそう 経済学部 教授)

私にとっての岡山大学附属図書館

神立春樹

1970年以来、私は岡山大学の一教員として経済学部（着任当時は法文学部経済学科）において日本経済史という科目を担当し、日本産業革命期を主とした研究に従事してきている。岡山大学に着任したときがそれまでの明治期の織物業の発展についての研究に第一のくぎりがつく頃であったことと、この岡山の地が日本近代史において注目すべきところであることなどによって、私の研究は漸次岡山に素材を求めての産業革命期の地方産業、地域民衆生活へと焦点を定めたものとなってきた。そしてこのような研究の成果を授業に反映させることを心がけてきた。

さて、本学は岡山医大、六高をはじめとするいくつかの歴史と伝統のある前身校を母体としたが、しかし社会科学系の、あるいは古くからの実業系の高等教育機関はなかったので、当初は社会科学系の図書資料は不十分たらざるを得なかったのであり、着任時の附属図書館での印象も、私の研究のうえでの図書資料も乏しいということであった。そこで明治・大正期の日本の産業・経済に関する図書資料の収集が一つの関心事となった。ところでこの明治以降の近代史研究は、経済史についていえば官庁統計が最も基礎的なものとなる。中央官庁統計書のうちのいくつかは、幸いすでに備え

付けられていたが、それでも欠けているものが多く、さらに、地域の実態究明の最も基礎的な資料である府県統計書は、地元岡山県のものでもきわめて乏しいという状況であった。このような基礎的資料の図書館への収集が大きな仕事となった。このことを学部内外の関連の深い分野の方々との協力、図書館との連携のもとにすすめてきた。

授業では、多人数の場合にはむづかしいことではあるが、授業時間中に2回ほど学生を図書館につれて行き、統計書などの基礎的資料によって講義したことを確かめるなどの作業をさせることにしている。それによって学生達は理解を深めるにとどまらずに、疑問を抱いたり、興味深いことがらや課題としたいことを見出したりするとともに、なによりも、図書館を身近なものとしてくれる。昨年担当した一般教育経済学を履修した教育学部の一学生は、「図書館の良さを知ってしまった……これから卒論製作の時なども利用することになるだろう」と記しているが、まだ2年生にしてこのような言に接するとうれしくなる。

このように、私にとっては、本学図書館は研究と教育という大学教員としての仕事の大きな拠となっているのである。ふりかえてみると、これまでの15年余は、図書館をそのような拠としてい

くことに意を注いだそれであったといえる。

今年の5月1日現在の附属図書館の蔵書数は127万1061冊となっている。1984年度の統計によると、蔵書数100万冊を越える大学は国公立では旧7帝大、旧3商大、旧2文理大を前身校とするものと、岡山、金沢、山口の15大学で、私立も11大学にとどまる。内容的にも多くの分野に及ぶなど本学図書館は急速に充実しつつある。また池田家文庫や地方史料などの地域史資料を系統的に収集している特色のある大学図書館となっている。しかしこの急速な充実は同時に、運用上の少なからぬ問題をともなっている。そしてそれらの問題の背景には図書館職員の定員の問題がある。ちなみに、1984年度に、蔵書数123万3千冊・学生数9948人という本学附属図書館の専任職員数は34であるが、149万6千冊・6784人の大阪市立は70、145万6千冊・4311人の一橋は48、136万冊・9961人の筑

波は90であり、本学の専任職員数は著しく少ない。なによりも適正な定員配置が望ましい。またますます増大・多様化する図書館業務の遂行には、電算化の一層の推進などが緊急の課題であることもいうまでもない。しかし、同時に図書館職員の創意・工夫をくみいれた運営が肝要であろう。

この夏季休業中も少なからぬ学生達が図書館を利用していた。授業が始まって日没後も閲覧室の明りがまだ点った。日曜日の館内の多少リラックスした雰囲気もまたなんともいえない。図書資料の集中の度合いが大きく、書庫への出入りも自由で事実上全館オープンであるなど、利用しやすい大学図書館である。学生生活の一つの拠点として活用することを期待してやまない。

〔注：1984年の統計数字は日本図書館協会編
『日本の図書館1984』による
(かんだつ はるき 経済学部 教授)〕

図書館を利用して

富島康雄

岡山大学附属図書館報の発行にあたって、利用者の立場から一筆書くようにとの依頼を受けました。私はあまり図書館を利用する事がないので、何も書く事がなく大変困惑しています。

私は時々文献検索をします。自分ではやり方がわからないので、忙しいのに気の毒だと思いつつ職員の方をお願いするのです。数年前そのリストを持って、岡崎の分子研に行った事がありますが、分子研の教授が大変珍しがっているのを見て、岡山大学の方が進んでいると悦に入りました。物理学を専門とする立場から言えば、文献検索で困ることはあまりないようです。

文献そのものの入手も図書館のおかげで本当に容易になったと思います。依頼書に記入して、参考調査係に預けておけば、大ていの場合10日もすればきれいなコピーが手に入ります。いろいろな苦情も耳にしますが、岡山大学の発足当時を経験してきた私にとっては、全く有難い事です。

大学の発足当時は、ほしい文献があると、35mmカメラを持って、一番近い広島大学まで写真をとりに行きました。当時は便利な汽車もなく、懐も淋しかったので、朝5時頃起きて岡山駅まで歩き

6時頃の一歩列車に乗りました。広島の物理の図書室でも当時は専任の職員が居ませんから鍵がかかっていますので、近くの実験室の戸をたたき教官の方に図書室をあけてもらいました。一日中論文を探したり写真をとったりして、岡山に帰るとまた夜中で自宅まで歩いた事を覚えています。それから一週間ぐらいかけて写真の現像焼付をし、やっと読める状態になるのです。広島大学にない時は京都大学まで出かけた記憶があります。こんな苦勞をして論文を手に入れる事の唯一の効能は、その論文を微に入り細を穿って徹底して読まずにはおれないという事でしょう。最近のように簡単にコピーが手に入ると、つい論文の上面を眺めるだけで終る事が多いようです。

文献の入手についてただ一つ注文をつけるとすれば、国内にない文献を探す手段が現在すこし不足しているという事です。外国に依頼して取寄せてもらえる時もありますが、入手できない事も可成の頻度でおこります。尤も、それ程入手しにくい論文は読まなくても研究上実害はありませんが、引用文献をできるだけ完全にする事が論文を書く心得の一つになっているのでお願いするわけです。

私は常々図書館の方と接して感ずる事があります。図書館の方は、その職務上当前の事なのですが、何でも完璧に揃えたがる傾向があります。そしてそれが大学にとって絶対必要な大切な事だと信じておられるようです。私もOxford大学を訪れ図書館に入った時、大ていの名のある雑誌が第1巻から完全に揃って並んでいるのを見て驚嘆し、これこそ大学の図書館だなと思った事があり、図書館の職員の方の気持ちも十分わかります。しかし、

特に理科系の人間にとっては、図書館にあるものは過去の既にわかったものだけだという意味で、研究上二義的な価値しかないという事を知ってお願いしていただきたいと思います。そうは言っても、今では図書館が我々の研究にとって不可欠なものとなっている事は否めません。今後も益々充実してゆく事を期待しています。

(とみしま やすお 理学部 教授)

附属図書館業務電算化について

近時大学図書館業務の電算化は、受入・運用業務等のハウスキーピング処理をはじめとして情報処理分野をも開発の対象となっている。本館においても業務のうち、取り扱う情報、事務量、処理のための必要時間と労力等を検討して、電算機処理による方が効率が高いと判断されるものを電算化してきた。これは作業時間の短縮、省力化、そして業務の質的向上を図り、余力をもって図書館利用者への情報提供サービスを充実させることを目指したものである。

本館は昭和48年学内計算機センターを利用して、利用アンケート集計、閲覧統計、文献複写受託業務、外国雑誌購入業務等を電算化した。続いて昭和54年事務局に中型コンピュータが設置されるに及び、これと結びオンラインによる図書貸出・返却システム、外国雑誌受付システムを開発し、業務電算化を進めてきた。

また図書館業務に共通して必要である書誌データ処理を行う目録業務は、電算機の日本語(漢字)処理上の問題、MARC(機械可読目録)を単独で維持すること、そして書誌データのオリジナル入力のための経費負担等々に困難がある。このため本館では館員が目録の機械化及び機械による情報検索サービスの基礎的な知識を得るため、洋書目録データベース「LC-MARC-II」処理システムを研修材料として開発した。

一方目録業務の全国的な電算化は、学術審議会答申「今後における学術情報システム」(昭和55年1月)をうけて実現した文献情報センターシステムにより昭和61年度から稼動始めようとしてい

る。このシステムは書誌、所蔵データベースの形成と、目録作成システムを「文献情報センターネットワーク」に参加する大学図書館が協同で構築しようとするものである。

本館はこのネットワークに参加するため、昭和58年5月よりワーキング・グループを作り図書、雑誌の目録業務の電算化を検討してきた。その結果昭和59年10月に本学の欧文雑誌所蔵状況を本学総合情報処理センターの電算機に接続している研究室の端末機から検索ができるサービスを開始した。さらに昭和60年5月から、文献情報センターの書誌情報を本館のハウスキーピング・システムに取り込むため、図書館業務の電算化のトータルシステムを目指して従来のワーキング・グループを再編成した。このワーキング・グループは雑誌、図書、運用、学外システムの4つに分かれ、本学総合情報処理センターの援助のもとにシステム開発を行っている。

同時にレファレンス部門の電算化は、世界最大の学術情報データバンクと云われるDIALOG及び国内データバンクのJOIS(JICST-online Information System)と結び、利用者に情報を提供している。

本館での業務電算化を推進させるため昭和54年4月「学術情報処理電算化推進委員会」を附属図書館運営委員会の下に発足させ、同年10月「業務電算機処理準備室」を設け、昭和58年4月これを「附属図書館整理課学術情報係」とした。

以上本館は業務電算化を通じて、高度情報社会の一機関としての役割りを果たすため努力している。

参考調査係

中央図書館の正面の階段を2階に上がると、右手にカウンターがあります。ここが、レファレンス・サービスを行っている参考調査係です。

現在、スタッフは係長を含めて3名です。

レファレンス・サービスとは、図書館の機能を活用して、利用者の要求を満足させるにふさわしい情報・資料を提供するサービスのことです。

サービスの基本は変わりませんが、学習・研究図書館として、常に時代の要請にこたえていくためには、その対応の仕方は、当然変わっていきます。では、簡単に係の仕事を紹介しましょう。

1. 図書館および図書の利用案内

2. 参考質問に対する回答

用語、事件、人物、現象、風俗、地理、統計などの事項調査を行います。

3. 文献検索

例えば、レポートなどの課題を与えられた場合、そのテーマを調べるために役立つ文献にどんなものがあるか、そういう調査のことで

a. 各種の文献リスト（書誌・目録等）の利用案内をします。

b. オンライン情報検索

オンライン情報検索は、中央コンピュータに記憶された何百万件の膨大な文献情報の中から、手許の電話と端末機を使って、テーマにかかわりの深いキーワードを打ち込むことによって、非常に早く必要な文献情報が入手できるシステムです。扱われる資料も世界中の雑誌論文のほかに、図書・会議録・技術レポート・特許など広範囲です。

現在、JOIS（自然科学分野）とDIALOG（全分野）システムによるサービスを行っています。昭和55年サービス開始以来、利用数

も年々増加し、係のサービスの一つの柱として定着しつつあります。

4. 文献の入手に関すること

文献の所在調査と、その所蔵館に対する複製依頼、図書の借用申込み手続きを国内および国外の図書館に行きます。

5. 池田家文庫等特殊文庫資料の利用および整理・保存に関すること

池田家文庫として、江戸時代約240年間にわたる岡山藩政史料および池田家襲蔵の図書合わせて約10万点を所蔵しています。そのほか、県下19家の江戸時代を中心とする地方（村方）史料約9万点も収集され、それぞれ目録が刊行されています。（池田家文庫総目録、近世庶民史料目録1～4巻）

これら貴重資料の利用についても、一般公開を原則としていますので、学内外の多くの人々に利用されています。学内学生においても古文書演習、卒論研究にと利用は増えています。

これからの大学図書館にとっては、世界中の図書館の特殊コレクションをも含めた所蔵情報の収集等、資料に関する情報の収集が、一つの大きな仕事になっていくことでしょう。大学図書館は、その窓口を通じて、広い文献の世界につながっているのです。

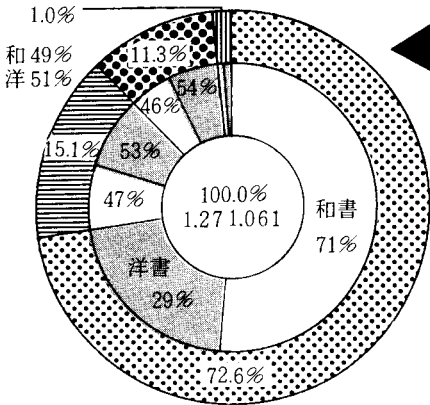
利用者から信用されるサービスをするためには、日ごろのスタッフの勉強は欠かせません。

一方、レファレンス・サービスの成否のポイントは、質問の受け方にあります。質問の核心がうまくとらえられるような、よい雰囲気作りも大切にしていきたいものです。気軽に、ご利用下さい。

館報名「楷」の由来について

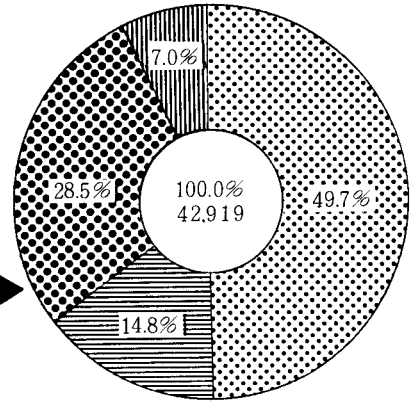
楷の木はうるし科で、学名を「トネリバハゼノキ」といい、枝が横に水平に張るために楷書の楷と名付けられたという。備前市にある岡山藩設立の閑谷学校に植樹されている楷の木は、大正四年林学博士白沢保美がが中国曲阜(チューフー)の孔子廟から持ち帰り苗に育てた後、儒教に関係深い所に分かち植えたものの一つである。楷の木の持つこうした来歴から、学問に関係する施設から植樹の希望が多く、岡大図書館にも学究の場にふさわしく、この木が植えられている。玄関東側に葉を繁らせている木は、農学部の畔柳教授から贈られたもので植樹以後三十数年、図書館と共に育ち、毎年晩秋には美しい紅葉を楽しませてくれる。

図書館統計



蔵書数 昭和60年5月1日現在

本館	72.6%	922,341
鹿田分館	15.1%	192,379
農研分館	11.3%	143,045
三朝地区	1.0%	13,296
合計	100.0%	1,271,061



年間受入図書冊数 昭和59年度

和漢書購入	49.7%	21,314
和漢書寄贈	14.8%	6,346
洋書購入	28.5%	12,242
洋書寄贈	7.0%	3,017
合計	100.0%	42,919

* 和、洋書別の%表示は各館毎の蔵書数を100%としたものである。

* 除籍、廃棄、管理換等の減数を差し引いた数値ではない。

参考業務利用件数					
業務内容別					
年度	文献所在調査	事項調査	利用指導	情報検索	計
1983年	6,910件 57.4%	2,206件 18.3%	2,725件 22.6%	205件 1.7%	12,046件 100.0%
1984年	7,417件 57.2%	2,430件 18.7%	2,941件 22.7%	183件 1.4%	12,968件 100.0%
1985年	7,581件 56.9%	2,483件 18.7%	2,990件 22.4%	269件 2.0%	13,323件 100.0%

参考業務利用件数				
利用者別				
年度	学内者		学外者	計
	教職員	学生		
1983年	4,096件 34.6%	6,360件 57.3%	1,385件 11.7%	11,841件 100.0%
1984年	3,876件 30.3%	7,195件 56.3%	1,717件 13.4%	12,788件 100.0%
1985年	3,988件 30.5%	7,346件 56.3%	1,720件 13.2%	13,054件 100.0%

▲ * 本館のみの集計
◀ * 係の紹介に関連記事記載

日誌

- 60. 4.18~19 第33回中国・四国地区大学図書館協議会総会（於松江東急イン）
- 60. 4.25 昭和60年度第1回附属図書館運営委員会
- 60. 5.21 昭和60年度国立大学附属図書館事務部課長会議（於東京医科歯科大学）
- 60. 6.12~14 第32回(昭和60年度)国立大学図書館協議会総会（於名古屋市中小企業振興会館）
- 60. 7. 2 池田家文庫等特殊文庫委員会
- 60. 7. 9 昭和60年度第2回附属図書館運営委員会
- 60.10.17~18 昭和60年度国立大学附属図書館事務部長会議（於弘前大学事務局）

<カット> 農学部教授 奥 八郎 <題字> 附属図書館長 久留島 陽三